

Campus キャンパス Topics 大学

第3回オープンキャンパスに1,117人が来場



見学や講義を終えた受験生は、大学の期待と意欲を膨らませ、入学後の自分の姿を思い描いているようでした。また、保護者や付添者からも満足したとの声が多く寄せられました。

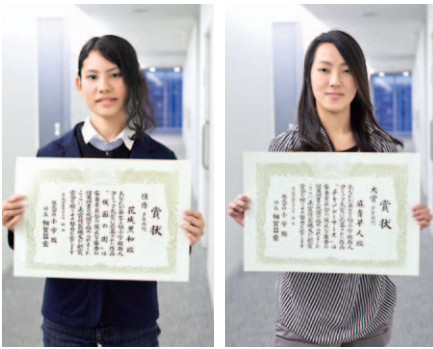
さらに、第2回オープンキャンパスで実施した公募制推薦入試対策講座（基礎学力試験（国語・英語）、「小論文」）のDVD上映では、第2回オープンキャンパスに参加することが出来なかった受験生を中心に、満席になるほどの盛況振りで、いよいよ間近に迫ってきた公募制推薦入試に向けて、傾向と対策についての最終確認を行う姿がとて印象的でした。

また、今回初めて実施した「保護者向けガイダンス」では本学の理念や入学後の学生支援体制、キャリア教育・支援などについて各担当者が説明を行い、参加された方は熱心に耳を傾けていました。

第1・2回オープンキャンパス同様に、入試相談、学科（専攻）相談、キャンパスツアー、特別企画、淑トークなどの企画には多くの参加者が集まっています。

10月19日、本年度最後となる「第3回オープンキャンパス」が開催されました。6・7月に引き続き、長久手、星が丘両キャンパスの雰囲気や施設を体感できる機会とあって県外からもたくさんの方に来場いただきました。

「小学館新人コミック大賞」にて本学学生が大賞、佳作を受賞



学科での学修や制作、サークル活動を通して培った思考力や企画・構成力、表現力、豊かな感性が栄えある賞につながり、浅野さん、花城さんは新たな作品制作へと意欲を燃やしていました。2人の受賞はマンガ制作に取り組む後輩たちにとって、希望の光や大きな刺激となったことでしょう。

高校時代から共にマンガ制作に夢中になっていた浅野さんと花城さんは、メディアプロデューズ学部で4年間、メディア表現を幅広く学び、マンガ制作のスキルを磨いていきました。3年次からはとりいかずよし先生のゼミに所属して作品制作とゼミ生同士の批評会を繰り返していき、さらに文芸サークル「幻想文学研究会」で仲間と創作活動に熱中。そして、就職活動と両立して東京の出版社に作品を持ち込み続け、今回の新人コミック大賞に挑みました。

メディアプロデューズ学部メディアプロデューズ学科4年の浅野早貴さんと花城加奈江さんが、第73回「小学館新人コミック大賞」少年部門に作品を応募し、栄えある賞に輝きました。浅野さんは審査員であるプロの漫画家から称賞を集め「大賞」を獲得し、花城さんも評価が高く「佳作」を手にしました。

studio point展 | キッカケのデザイン



地場産業との連携で商品化された作品も多数あり、木曾檜と升の生産で名高い岐阜県大垣の「HAKOMASU」、瀬戸・美濃地方の陶磁器ブランド「彫付 | HORITTSUKE」や「美濃和紙を用いた「郡上おどり文具」、名古屋のソファ専門店「FLANNEL SOFA」や有松の「わいん商アンペロ」の店舗デザインなどブランドデザインを含むトータルなデザイン提案が紹介されました。

9月24日〜10月10日、都市環境デザインコースの拠点、8号棟5階に設置するミニギャラリーでは、1976年生まれの澤田剛秀氏と1980年生まれの大山圭史氏という二人の若手デザイナーからなるデザイン事務所「studio point」に協力を仰ぎ、「studio point」展「キッカケのデザイン」を開催しました。大学の先輩後輩という縁で結成された彼らのデザインはまさに刺激に溢れていました。幅広いデザイン分野を手掛けることのできる確かな才能、頭の柔らかさ、貪欲さ。展覧会の準備などの機会を通じて、それは多分に伝わりました。彼らに憧れる他大学の学生たちも設営作業に加わり、みるみるうちに出来るようになるのは圧倒的なものでした。白い正方形の紙面をレイヤー状に展開させた、作品の見え隠れが楽しい空間構成。その中に、プロダクト、グラフィック、空間デザインなどの多彩な展示品が設置されました。

都市環境デザインコース企画展「生きること」 思想・心象メディアとしての建築 / 色彩モノクローム



「生きること」をテーマに、卒業設計10作品と700点を超える写真群をコンテンツとした展覧会です。卒業設計としては、実現性に縛られず、生きるためのメッセージを発信する媒体として建築を捉えた作品を選びました。また、設計作品の作り方を、より広く「生」を表現した写真群で囲み、テーマを追い込みます。言葉は極力廃し、論理で解ける要素を減らした展示。そこには、煌びやかだったりエネルギーギッシュだったりする生の「表」の側面と、日頃目を向けないあるいは向けたくない裏の側面が併存します。

ギャラリー中央の空間には切り花を活けました。つぼみだつた花たちが、やがて優雅で甘い香りを放ち、枯れてゆきます。それと同時に、最初は300点ほどだった写真パネルが日を追って増え、ギャラリーの壁面を埋め尽くしてゆきます。会場は常に工事中、「生きること」に完成などありません。展覧会は時間軸を擁して成長し、それ自体が生を育みます。

そこから何かを読みとり新たな行動を起こした人々、横目で見てただ通り過ぎていった人々。教えてもらうことに慣れた学生たちにとって、この展覧会は奇異な存在在だたでしょう。



Campus キャンパス トピックス Topics

大 学

デザインスタジオのしごと展

2008年からスタートした都市環境デザインコース「ミニギャラリー」の記念すべき第50回目の企画展は、「デザインで人を幸せに、社会を豊かにする」をポリシーに活動する間宮農一「千デザインスタジオの展覧会」デザインスタジオのしごと展を開催しました。11月11日から21日の開催期間中には、代表・間宮農一氏の講演会「デイロップ・アーキテクトをめざして」も併催され、学外からも多くの方に来場いただく盛況なイベントとなりました。

展覧会会場は、スタジオを象徴する風景としての長テーブルを中央に配した構成。美味しそうな料理を囲んだ団欒のひと時のように、手の込んだ模型やドローイングスケッチが並び、観る者をワクワクとした気持ちにさせてくれました。ものづくりに没頭するスタッフたちが居心地よく幸せな時間を過ごす空間。引越したばかりの新築スタジオの様子もご紹介いただきました。

今このときを上手く立ち回るだけでなく、社会への問題提起を欠かさずにデザイン提案を行う間宮氏。東海圏の学生たちへ実施設計や本番イベントの機会を投げかけるなど、チャンスメーカーさえも買って出てくれる、まさに兄貴的な存在のように思います。



オープンエンズ アイランド展

オープンエンズ(OPEN ENDS)は、アートディレクター・矢野まさつぐ氏が率いる名古屋拠点のデザイン会社です。広告、編集、ロゴといったグラフィックデザインを主に数々のデザインを世に送り出し、2013年はカンヌ国際広告賞金賞はじめ11もの賞に輝きました。都市環境デザインコース・ミニギャラリーでは、以前コースパンフレットをデザインいただいたご縁から、11月26日〜12月12日、企画展「オープンエンズ アイランド展」を開催しました。仕事と個人的なアートワーク、パートナーの白澤真生氏の作品も併せて出展いただきました。

12月4日は、飽きっぽい性格が功を奏し多様なデザインの仕事に連投できるとなったという矢野氏をゲストに座談会を催しました。「僕は最短距離でデザインを仕事にしました。当日テーマ「デザイナーを生きる」は、デザイナーになりたいと決めた若き日からの矢野氏の生き方です。会場には就職活動がスタートしたばかりの学部3年生の姿もありました。「センスは努力で補えますか」：「矢野氏からは『デザイナー見習い』のとき、いわゆる雑用だつて自分ではなければこれほど上手くできないし、それが誰かのためになっているのだから嬉しかった。」とストレートに働く喜びが発せられました。不安でいっぱいだという学生たちの顔に笑みがこぼれました。

